

第16回 世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの報告

「情報の海を冒険しよう！」

令和3年10月30日（土）

於：教育センター おおぐま

世田谷区立中央図書館

第16回世田谷区子ども読書活動推進フォーラム 「情報の海を冒険しよう！」

実施概要

- (1) 実施日時 令和3年10月30日(土) 13時30分～15時30分
- (2) 場 所 教育センター「おおぐま」
- (3) 参加人数 15名+オンライン25名
- (4) 内 容 第1部 講演「世田谷区のGIGAスクール構想について」
講師：會田孝一氏（中央図書館館長）
- 第2部 講演「学校の勉強はなんのため？」
図書館とインターネットをフル活用して、
情報の海を冒険しよう！」
講師：山崎聡一郎氏（教育研究者）
- 第3部 質疑応答

目次

開会挨拶	…P. 2
第1部 講演	…P. 3～6
第2部 講演	…P. 7～19
第3部 質疑応答	…P. 20～23
資料	…P. 24～28

第16回 世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの開催にあたって

中央図書館館長 會田孝一

皆さん、こんにちは。中央図書館長の會田でございます。本日、フォーラムに参加いただきまして、本当にありがとうございます。コロナ禍の中ということもあって、なかなかイベントができなかったのですが、ようやく緊急事態宣言も終わり、感染対策は十分に行いながら、少しずつこのようなイベントも再開しているという状況です。そういった中、今後も with コロナということで、感染症ともうまく付き合いながらいろいろなイベントを開催したいと思います。今回は現場とオンラインのハイブリッドな形での講演会ということで、今までやったことがありませんのでトライ・アンド・エラーのような形になるかもしれませんが、よろしくお願いいたします。

本日はGIGAスクールを一つのテーマにし、この後、山崎先生にご講演いただきますが、その前に世田谷区の状況について私から説明させていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【第一部 講演会】



それでは GIGA スクール構想について、世田谷区でどのように進めてきたかを中心に、15分から20分ほどお時間をいただき、説明をさせていただきます。本日会場にお越しの方には、紙ベースの資料をお渡ししています。オンラインで参加の方には、資料共有をさせていただければと思います。

GIGA スクール構想の全体イメージ（文部科学省資料より抜粋）をご覧ください（資料・図1）。もともと GIGA スクール構想は文部科学省から提言されたものです。「子どもたち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育 ICT 環境を」、「目指すべき次世代の学校教育現場」ということで、ここにあるような「学びにおける時間、距離などの制約を取り払う」から、「学びの知見の共有や生成」までを目指すという理念に基づいています。具体的には、各学校、児童生徒一人ひとりに最適なコンテンツが提供できるように、タブレット端末を1人1台ずつ配備しましょうということですが、そのためには学校にはネットワーク環境が必要です。

学校のネットワーク環境は、今まではそれほど充実していませんでした。世田谷区で言いますとかなり古い話ですが、（環境整備が始まったのは）2002年でしょうか。その前、1998年ぐらいから、区役所でもホームページなど、インターネット環境が整ってきました。1990年代に、それまでは本当に学術的なところでしか開放されていなかったものが家庭に開放されるようになり、実際には区役所も含めて2000年ぐらいから広く配備されてきたという状況があります。そういった中で、パソコン教室ということで各学校に40台ずつぐらいのデスクトップパソコンがあり、それを活用するという状況がずっと続き、それがノートパソコンになったわけです。

ネットワークについては、この建物、教育センターに各学校からのネットワークが集中して、そこでいろいろなセキュリティ、ファイアウォールやプロキシサーバーをきちんとクリアしたうえでインターネットとつながる、ということできずとやってきました。そうすると90校からの負荷が全部集まってくるので、動画を自由に見るなどのことができない状況がずっと続いていました。これではとても GIGA スクール構想に対応できませんので、文部科学省からも各学校のネットワーク環境を充実させましょうという話が来たわけです。併せて、クラウドの活用や、実際の学校外のデータおよび教育委員会以外のデータも含めてのデータの標準化、いろいろなドリル等のコンテンツも使うことが語られていましたが、まずは二つ、1人1台の端末を整備するというこ

と、学校のネットワークを整備するということが、主に言われていたことです。

それでは次のページ、こちらは GIGA スクール構想とその整備範囲です（資料・図 2）。世田谷区の状況ですが、GIGA スクール構想の実現ということでは、ここにあるような Society 5.0 時代を生きる子どもたちにとっての環境を整えなければいけません、なかなか遅れている状況でした。そこで、1 人 1 台の端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することになり、それと並行して、クラウド活用推進や ICT 機器の整備、調達体制の構築を進めてきたわけですが、ここで一つ、大きな変化がありました。それが下の年度別整備計画のところ、当初 GIGA スクール構想の話が出たときには、3 年計画でした。世田谷区ですと区立小中学校の児童生徒が約 5 万人、そして小学校 61 校、中学校 29 校ですから、合計 90 校でそれを一気に整備するのは大変です。私たちも正直、3 年ぐらいかけて、ある程度学年別に分けながら整備してゆくのかな、と思っていました。ところがご案内のとおり、新型コロナウイルスのために急な学校休業が起り、オンラインでの授業やオンライン活用が必須になって、やらねばならぬことになったのです。そういった中で方針が変わり、GIGA スクール構想の端末整備ネットワーク整備を 2020 年で全部やってしまおうということになりました。タブレットの整備と併せ、90 校の、大容量に対応したネットワークの整備を、2020 年度に一気にやらざるを得ない状況でした。

世田谷区の整備内容の詳細については、そんなに難しい図にはしませんでした、このようになっています（資料・図 3）。児童生徒 1 人 1 台の端末、約 5 万台の整備をしたことと、また校内通信ネットワークについては、専門的に少しだけ説明をさせていただければと思います。下のほうですが、ネットワークの整備については、先ほど言いましたように、今まではセキュリティも含めて、いったん教育センターに集中するセンター方式でインターネットつながる形だったものを、各学校から一つずつインターネットにつながるような環境を整えました。そして普通教室については全教室、約 1,500 強ですが、図の右下、四角で囲んだ「各学校における校内 LAN の整備内容」に記載のように、無線アクセスポイントを天井に設置し、40 台が 1 度に接続してもネットワークが途切れることがないようにものを設けました。これが、約 1,500 台です。

学校では、今までも各教室に一応ネットワークはありました。どういう意味かということ、線はあり、ケーブルは引いていました。けれども一度に使用することは想定しておらず、そういった機器を教室に持ち込み接続して使っていました。端末は 40 台だったり、大規模校だと 80 台あった学校もありましたが、持ち運んで使っていたものを、今回 1 人 1 台ということで全員分のタブレットが整備されたので、すべての教室で一度に使っても大丈夫な体制を作らなくてはいけなわけです。そうすると、各フロアの通信機器とか、その下の基幹通信機器など、今までの通信機器では対応で

きないこともあり、それらの機器の入れ替えを行いました。そしてケーブルについても、本当に通信が集中する部分だけは、簡単に言うと太いケーブルにしました。カテゴリ-6 というもので、それまではカテゴリ-5e というケーブルなのですが、それでは対応しきれない場合は、LAN ケーブルの引きなおしもしました。そして、各学校からインターネットに直接出て行くので、学校ごとにセキュリティの設定も行いました。併せて、コンテンツについては一部制限をかけて、内容は全学校一緒ですが、最低限のセキュリティを学校ごとにかけ、そしてインターネットに接続するという形で 2020 年度に整備しました。それも 4 月からやっているわけではなく、こういったネットワークについては本当に最後の 1、2、3 の月に一気に駆け込みでやり、タブレットについては 11 月ぐらいに、中学 3 年生と小学 6 年生にまず配布し、その後に各学年に少しずつ配備してゆく形を取りました。いろいろと学校にもご負担いただきながら、本当に急な話で、3 年でやることを急に 1 年でやらなくてはいけなくなりましたので、そういった意味ではいろいろと混乱もありましたが、なんとか整備をしたというのが世田谷区の状況であり、全国、また他の区に聞いても、なかなか大変で、バタバタの中やったということでした。

今後のイメージですが、今日は、私は教員ではなく、これは先生向けの講座ではありませんので、授業の内容について触れることはできません。ただ、実際にこれからどのように活用してゆくかがとても大事ですので、それについてイメージして

いることをまとめました。苦労話みたいなものばかりしても仕方がないわけで、この後、整備したから終わり、ではもちろんありません。最後にこの内容を説明させていただいて、私からの話はここまでにしたいと思います。

スライド資料（資料・図 4）の真ん中に、教育 DX という言葉があります。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、Digital Transformation ということで、変革してゆくんだ、ということがよく言われています。そういった要素は当然必要だと思いますが、ICT をただ入れればそれで DX、では決してありません。どう変わってゆくか、変えてゆくかを、これもごっこりしたのですが、文部科学省も最近これと似たようなことを言っていますが、私なりにまとめました。

一番上に書いたのは「子ども」です。主役である子どもが、Society 5.0 とかシンギュラリティとかいろいろなことがありましたが、そういった、これからの時代を生き抜く力を有する子どもになってもらわなくてはいけない、そういった子どもを育て、そのためにも学びが変わってゆくのですが、それは ICT だけではなく、学びを変えなくてはいけない、ということになると思います。そのためには、教員ももちろんですが、我々教育委員会事務局も、そして保護者の方や地域の方も含めて、支えていただくというか、支援してゆくような立ち位置になるのかと思います。また、それを行うにあたっては民間事業者の力も必要だと思っています。なので、この五角形ではありませんが、子どもが主役であって、その中で「保護者

「地域」については、今までは一方的なコミュニケーションだったと思います。以前は、緊急情報通信メールというものがあり、これはある意味、メルマガのようなものでした。緊急のときに、メールを学校から保護者の方にお送りするだけだったのですが、それが双方向的なものにこれからは変わってゆくのだと思います。現在、世田谷区では「すぐーる」というアプリを入れ、試験的ではありますが、今までは本文だけしか送れなかったものに、いろいろな添付ファイルをつけられるようになりましたし、今まではメルマガで、誰に送っているかの管理はありませんでしたが、そういったことも管理できるようになり、既読かどうかも確認できるようになりました。今後は欠席連絡などにも使えるよう順次進めているところです。これは一例ですが、そういった双方向のコミュニケーションにどんどん変わってゆくと思います。

そして「教職員」の働き方が変わる。どこでも働ける環境や、いろいろなデータを総合的に活用することによって、より質の高い教育を実現することです。

そして左下「教育委員会事務局」については、「サポートが変わる」としています。教育委員会事務局にはさまざまな形で学校を支える役割がありますが、より一体となってサポートする体制になってゆかなくてはいけないと思います。そういったものがICTの一助となるのかなと思います。このように、学校は急にICTが進歩しましたが、それに比べて区役所はどうかというと、進ん

でいません。役所も学校に負けないように対応してゆかなくてはと思います。

「事業者」については、シーンが変わってゆくのだと思います。今回 GIGA スクールを入れた、通信環境を整理したことによって、保護者の方も、わからないことがあったら、学校に技術的なことを確認してもなかなか解決しないこともあると思いますので、直接「事業者」に電話で質問できる窓口を設けました。それ以外にも成績管理などをする「校務支援システム」や、就学を管理するシステム、いろいろな相談を管理するシステムがあります。それぞれに問合せ先が違くと効率が悪いので、それらを統括的に支援してゆくことが、コスト面も含めて必要になっているという思いもあり、このような絵を作らせていただきました。以上です。私からはこのへんで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【第二部 講演会】



[山崎聡一郎氏プロフィール]

教育研究者、ミュージカル俳優、写真家、合同会社 Art & Arts 社長、慶應義塾大学 SFC 研究所所員など幅広い分野で活躍。日本初の法教育学習塾「子ども六法スクール」を運営するほか、NHK「いじめをノックアウト」番組委員を務めるなど、研究と実践の両方からいじめ問題に取り組んでいる。著書に『こども六法』（弘文堂）、『ネット・スマホ攻略術』（講談社）など。

皆さん、こんにちは。オンラインでご覧の方もこんにちは。今日は、学校の勉強とはそもそも何のためにあるのかという話と、図書館の利活用の方法、情報収集の仕方、気をつけなければならないことを、中学生向けに語ってくださいという講演の依頼をいただきました。中学生くらいの子がオンラインで見ているか、今日いらっしゃるか、あるいは、これからお子さんに触れられる方が、それくらいの年齢の子にどうやって教えたらいいかをお話しできればと考えています。

今は、言うまでもなくインターネットの時代です。インターネットなどを一切使わずに生活していますという方はいますか。お、いますね。すばらしい。実は私の父親もそうです。あと、私の祖父は割と早い段階で、私が中学二年生の頃にインターネットを契約しましたが、高校を卒業するくらいのタイミングで解約しました。だから今、祖父にはインターネットがありません。インターネ

ットはあって当たり前の人が世の中では大多数になってきました。しかし、ない人もいますし、必要ない人もいる、両面あるということ踏まえつつも、今の子どもたちにとっては、インターネットは当たり前のものです。そうすると、図書館や本は別にいらない、となってくる子は少なからずいるわけです。そういう感覚になっていると、別に図書館に行く意味はあまりないわけです。それでも図書館に行くことに本当は意味があって、その本当の意味とは何か、どのように伝えたらわかってくれるのか、そんな話を今日はしたいと思います。

せっかく今、私のことをご紹介していただきましたので、そのパートは飛ばして、ちょっと質問させていただきます。皆さんが図書館に来るときはどんなときでしょうか。読みたい本があるとき、借りたい本があるときはイメージしやすいと思います。自習室として図書館を使う学生もいるかもしれません。あるいは、何年か前には鎌倉図書館が、9月1日問題で、9月1日に二学期が始まるタイミングで、もし学校に行くのが辛かったら図書館においてよというツイートをしたことが話題になりましたが、居場所としての機能も図書館では求められるようになってきているところもあります。図書館というのは、名前のとおり、本がいっぱいあるところというイメージがあつつも、昔から視聴覚資料として、DVD など目で見、耳で聴く資料のある場所もあります。またかなり早い段階から、一家に一台パソコンがあるという状況になる前の時代から、自由に使えるインターネットの環境をいち早く整備した場所でもあります。図書館の役割というのは、ありとあらゆる情報にアクセスする拠点として存在することが、そもそもの大前提であることをまず理解する必要があるかなと思います。

では、今の子どもたちが図書館に来るときはど
ういうときなのかを考えたときに、今、いくつか
の例を挙げましたが、「調べものをするときに気
をつけることはありますか」という質問を投げか
けてみます。夏休みの宿題などで自由研究が出た
りすると、まじめな子は、それなりに図書館に来
る機会が増えると思います。そうでない子もいる
と思います。まじめな子でないという意味ではあ
りませんが、中にはインターネットで全部調べれ
ばよいと自由研究を終わらせる子もいるはずで
す。確かにインターネットにはだいたいの情報が
出ていますから、小学生の自由研究レベルでは、
インターネットで調べれば事足りるといえば事
足りるわけです。僕も今28歳ですが、15~20年
前に小学生だった頃は、当時インターネット自体
はありましたが、今と比較にならないぐらい情報
量は少なかったわけです。その時代から変わって
いますから、だいたいの情報はネットでアクセス
できます。そうすると、たぶん図書館に来ないで
調べものをする人もいるわけです。このような状
況において、気をつけなければならないことは一
体何でしょうか。

調べものをするときに気をつけなければならないことは、これからの時代に生きるための情報力として、まず一つ目は情報を調べる力です。二つ目は、情報を、事実をと言ひ換えますが、精査する力です。三つ目は、事実を評価する力です。余談ですが、ホワイトボードを使うのはこれが最後ですが、ご覧になってわかるように、僕は字を書くのがすこぶる苦手で、就職活動でも得意なこと、苦手なことについての質問が必ずありますが、苦手なことは字を書くことですよと言っていました。だから学校の先生にはならなかったんですね。

調べものをするときに気をつけなければならない、あるいは、よりよく調べものをするために

身につけておかなければならない力として、三つの力を挙げました。一つ目の「情報を調べる力」とは、単純に、より多くの情報を集めてくる力です。インターネットの検索窓にキーワードを入れる。これは誰でも行いますが、自分が求める情報にたどりつくために入れるキーワードは、何でもよいというわけではありません。キーワードで入れるか、文章で入れるかでも結果は変わってきますし、キーワードを組み合わせる探すこともあります。最近のGoogle検索では、よく検索されているキーワードの組み合わせを提案してくれるサジェスト機能があります。たとえば「世田谷区」で調べると、世田谷区役所や、大きな会社のページが出てくるかもしれません。しかし「世田谷区__図書館」で調べれば、世田谷図書館や中央図書館、あるいはほかの図書館が出てくるでしょう。あるいは「世田谷区__おいしいラーメン屋」を探した場合、まずいラーメン屋を探す人はいないでしょうが、「世田谷区」だけでは、おいしいラーメン屋の情報にはたどりつきませんが、このようにキーワードを組み合わせることによって情報が出てくるようになります。また、「世田谷区で一番評判のよいラーメン屋」の検索結果が、たとえば豚骨ラーメンだったとします。僕は豚骨ラーメンよりも醤油ラーメンのほうが好きなのですが、その場合は検索キーワードに「醤油ラーメン」を加えればよいわけです。このように、自分の求める情報にたどりつくためのインターネット検索ひとつとっても、キーワードの選び方、並べ方、入れ方など、調べる力が必要になってきます。

ただインターネットは万能ではなく、世田谷区内のおいしいラーメン屋をまとめた雑誌や本のほうが詳しい情報が載っているケースがあります。そういった情報にアクセスするために本屋で調べる場合、板橋区の本屋に行ってみてもあまり

置いておらず、世田谷区に特化したものは、たぶん世田谷区内の本屋にありますよね。このように本屋に行くにしても、そこに置いてあるのはどんな本なのかという視点が必要です。『全国ラーメン大全』のような本は、板橋区の書店にも世田谷区の書店にもたぶんあるでしょう。そのような本が欲しいのか、世田谷区に特化した本が欲しいのかによって、どこの本屋に行くかが変わってきますし、それが果たして図書館に入っている本なのか、ということです。

たとえば、世田谷を舞台にした、とあるラーメン屋の経営を題材にしたコミックがあるとして、それが図書館に入っているかといえば、たぶん入っていないと思います。どこに行けばその本にアクセスできるのか、それぞれの本がどのような強みを持っているのかを見極める方法。あるいは、TVで特集されていることもありますよね。「今日は世田谷区のおいしいラーメン屋をピックアップしました」というバラエティ番組があるかもしれない。どの情報源にあたったら、どのような情報が得られるのか。今自分はこの情報が欲しいから、ここにあたろうと、選択肢を広く持って、自分が一番欲しい情報が取れそうな場所を選んでゆく、というのが「情報を調べる力」の一つです。

二つ目に大事なのが、事実を精査する力です。フェイクニュースという言葉聞いたことがあると思いますが、いわゆるデマ情報というものが、残念ながら世の中にはあります。その理由はいくつかありますが、一つは儲かるからです。たとえば、自分がシャンプーを売っている場合、「髪を毎日洗わないと35歳までに禿げる。だから毎日のシャンプーが大事」というデマ、もちろん嘘なのですが、このようなデマを流せばシャンプーは売れると思います。また、自分のものよりも優れたシャンプーを他の会社が売っているとしたら、

そのシャンプーについて、「絶滅危惧種になっている動物の血液から採取した成分を使っている。この製品を使うことは環境破壊につながる」というデマを流します。これによって、環境問題に関心の高い人はそのシャンプーを買わなくなり、自分の製品を買ってくれるようになるかもしれません。このような動機づけがあつてデマを流すわけですが、このことは河野太郎さんもワクチンに関連して言及しています。あとで調べてみてください。

もう一つの理由は、注目されたいから。デマというものはセンセーショナルで話題性があります。熊本地震のときに大ごとになったのは、「動物園のオリが壊れてライオンが脱走した」というツイッターのニュースが流れました。これはデマなのですが、発信者はライオンが道端を歩いている合成画像を作って流しました。このツイートはたいへん拡散し、自治体の災害対策窓口にも問合せが殺到しました。大地震が来たというだけで心配なのに、ライオンが逃げ出してウロウロしているという情報が来たら不安になります。役所も、地震の対応に追われている中、このような問合せの電話がかかってきたら、業務の妨害を受けるに等しいわけです。情報を精査するつもりで電話をかけているのかもしれませんが、その前に、「愉快犯のデマ情報か、それとも本当に起きているのか」といったん立ち止まって精査する癖をつけなければなりません。そうしないと、来た情報を全部鵜呑みにすることになってしまいます。これが、「事実を精査する力」です。とくに、インターネットが普及して世の中に膨大な量の情報が流れてきます。こういう世の中だからこそ、この力はより求められるようになっています。

三つ目が、これはけっこう日本人が苦手なのですが、「事実を評価する力」です。これは、ある

事実について、よいことか、悪いことかを判断する力のことです。こう聞くと、当たり前のことのように思われますが、ここで注意が必要なのは、「ことよしのよしあしを自分で判断しましょう」という意味ではありません。(前述の)一の「情報を調べる力」と二の「事実を精査する力」は、情報を集め、把握するためのものです。これらのことと、手に入った情報を評価することとは区別しなければなりません。一、二で集めた情報がよいことなのか悪いことなのかというのは、個々人の価値観によって変わってくるのはよいのですが、これが一、二の情報を調べるという段階とごっちゃになっていると、面倒くさいことが起きます。

さて、ここでようやく、会場でお聞きの皆さんのスライドになります。[例]のところを見てください。(資料・図5)「いじめが増えるのは悪いことだ」。皆さんはこの命題についてどう思いますか。どう思うか、というのは評価ですが、では「いじめが増えるのは悪いことだ」というフレーズが持つ問題点について、情報を調べる力、事実を精査する力、事実を評価する力の三つに分けて考えてゆきます。ここで述べられている「いじめが増える」について注意しなければならないのは、まず一つ目に調べるということですね。いじめとはそもそもどういう現象なのでしょう。か。「いじめが起きている」というのは何が起きていることなのでしょう。その定義をまず調べるのが大事です。また、いじめが「増えている」というのは、一体どこを見たら確認できるのでしょうか。誰かが「最近いじめが増えている感じがする」と言っているだけでしょうか。それとも、どこかの新聞などで報道されていたか。あるいは、何か統計がありますか。どのページ、どの場所に行けばそれが確認できそうですか。これが一番目の情報を調べる力です。

次に、二番目の事実を精査する力です。「いじめが増えています」と、新聞でも言われているし、そのように騒いでいる専門家もいる。では、果たしていじめが増えているというのは事実でしょうか(資料・図5のグラフを掲示)。これは、去年出された文部科学省の資料から抜粋したものです。小中高校および特別支援学校におけるいじめの認知件数は543,933件。前年度が414,378件でしたので、前年度から13万件近く増加しています。グラフを見ても、確かに増えていますね。ですから、「いじめが増えている」というのは、どうやら事実らしいということがわかります。なぜ事実だと言えるのですか? この文部科学省の資料に出ています、と裏付けができます。ここまでは皆ができることです。

問題は、この本当らしい事実「いじめが増えている」というのはよいことなのか、悪いことなのかということです。悪いと判断するほうがしっくりくる人がいるでしょう。「これだけいじめの問題が騒がれているのに、一向に抑えられていないじゃないか。よくないことだ」という人もいます。一方、文部科学省の評価は逆で、いじめが増えているのはよいことだと判断します。なぜなら、これはいじめの認知件数という、学校の先生がどれくらいいじめを発見しているかという統計だからです。別の、日本財団などが行っている調査では、いじめの件数を「いじめに遭ったことはありますか」という質問ではなく、「～のような、いやな思いをしたことはありますか」という聞き方で経年調査している例があります。その調査結果によると、だいたい、世代が変わっても、どの学年でも、皆同じくらいいやなことに遭っているという統計結果になっています。ということは、実際にどの程度見つかっているかはわかりませんが、実はいじめの件数はそれほど変わっ

ていないのではないかと、という仮説が立てられるわけですが、ただしこれも、事実を精査してください。今僕が言った仮説「だいたい毎年、いじめの件数は同じくらい」は、裏付けがあるのでしょうか。これは今僕が言いました。これから導き出せるのは、「いやな目に遭ったことはありますか？」という聞き方をして、何年聞いてみてもだいたい毎年同じくらいの数字が出てきます。これは一つのデータですね。ただ、こうとも言えます。いじめは、出てきたものがデータになります。でも、見つからないものはデータになりません。だから、見つからないいじめは、本当に起きているのかどうか確認しようがないという問題があります。目で見えているものだけを信じましょうという考え方に立てば、見つからないいじめは起きていないのと同じということになりますが、僕が立っている前提はそうではありません。先生が見つめることができるいじめだけではなく、巧妙に隠されているいじめ、先生が見落としているだけのいじめ、子どもたちがひた隠しにしているいじめもあるかもしれません。そのようないじめは、本当に“ないもの”として考えても大丈夫ですか。文部科学省はそういう立場なのです。いじめの件数はある程度はずっとあるはずで、その中で先生が“見つけた”いじめが統計的にはずっと増え続けているという図ですね。ということは、ある程度いじめがあつて、先生が見つめる量が増えているということは、先生に見つけられず、隠れているいじめの量が減っているということですね。それはよいことなのではないか、という評価になるわけですが、いじめの認知件数が増えているというのは一つの事実です。これは調査にも出ており統計的にも裏付けがありますが、それに対する評価は、よいとも悪いとも言えるということです。

先ほど、「評価」を「事実の把握」とごっちゃにすると面倒なことが起きると言いました。これはどういうことか、学校の先生の立場になって考えてみてください。学校ではそれぞれ、いじめ防止基本方針というものを作っています。皆さんのお子さんの通う学校でも、いじめ防止基本方針が絶対にホームページに載っていますので見てみてください。そこで「いじめゼロ」という言葉が出てきたら要注意です。いじめゼロとはどういうことなのでしょう。理想的には、いじめで苦しむ子どもがゼロになったら、こんなによいことはありません。ですが、いじめゼロとセットで語られるのは、「いじめは絶対に許されない。だから一件も起こしてはならない」ということです。これは本当に教員研修で言われることがあります。間違っているとは言いませんが、（聞く側の）意識としては、「いじめは絶対に起こしてはいけないものだ、一件たりとも起こしてはいけない、起こした時点で負け、由々しき事態であり大変だ」となってきます。すると、いじめを発見することが“悪いこと”になります。「評価」が一緒になってしまっています。人間は都合の悪いことを隠そうとします。事実の把握と評価がごっちゃになっていると、事実を歪める方向に力学が働きます。事実としてはいじめが起きていても、いじめが見つかるのは“悪いこと”だから、なかったことにしてしまおう。このようなことが起きます。これは、事実の把握と評価が混ざっているために起きることです。

いじめとはどういう現象かを調べたときにわかったこと。いじめの認知件数が出てきました。その推移がグラフで出てきた。調査方法はどうかだったのだろう。何を調べたのか。本当なのか。誇張ではないのか、ということを探らなければいけないわけですが、そして、どうやら本当らしいとわ

かったとしても、それに対する評価というのは、その事実の把握自体とは分けて考えなくてはいけない、ということです。

この事実の把握と評価を分けて考えるというのが、日本人は苦手です。大学院まで行くと、これをめっちゃめっちゃ勉強します。永遠に、ひたすらやります。ですが、これを大学までにやるというのはなかなかできていないので、ぜひこれを覚えておいていただければと思います。

次に、「どうやって調べものをしていますか?」。最初の質問に戻ってきた感じですね。皆さんは気になる情報があったときに、どういう方法を使っているのでしょうか。TV、インターネット、雑誌、新聞など、いろいろな方法があるということは冒頭でもお話ししました。おそらく聞いている方によって、どれを最初に使うかは変わってくると思います。「調べる力」の話をしたときに、それぞれの情報の強み、弱みを把握しておかなければいけません。ただ世代間で、それぞれの情報源への信頼度が異なります。これは総務省が2018年に出したグラフで、メディア別の信頼度を示したものです(資料・図6)。先ほどあげたTV、インターネット、雑誌、新聞の各情報媒体が、どのくらい信用できるかを世代別に表しています。全体で見ると、新聞が一番信頼でき、次にTV、インターネットはその半分くらいという感じです。この認識は四十代~六十代では顕著ですが、四十代はインターネットへの信頼度が高くなっています。また、若い層になってくると、TV(の信頼度)が増えてゆきます。とくに十代で突出しています。これは当然といえば当然で、この年齢ではインターネットを自由に使える家庭があまりないからです。ただし、これは2018年の調査で、そこから3年がたち、その間にGIGAスクール構想の話が冒頭にありましたが、今の子どもは一人一台の

タブレットを持っており、子どももインターネットで調べるのが当たり前になっています。アカデミック(大学教育)の世界から話を聞くと、今どきは、書籍に書いてある情報よりもインターネットに出ている情報のほうが信頼性が高いと考えている子どもが多いそうです。そんな馬鹿な、という感覚ですが、本当なのです。インターネットでは何でも出てくるので、そのように感じるのだと思いますが、そういう情報もあり、インターネットに対する信頼度がどんどん高くなっているわけです。ところが、メディアにはそれぞれ強みと弱みがあるということを私たちはきっちり認識しなくてはなりません。とくにインターネットは要注意です。それぞれの情報源の特性を理解するというのが、正しい情報にアクセスするうえでとても大事になってきます(資料・図7)。

たとえば新聞、これは全体で情報の信頼度が一番高かった媒体ですが、新聞の発行部数は減る一方で、どの新聞社も苦しいといわれています。新聞の特徴は、情報の速さ、正確さ、詳しさのバランスが取れていること、社会面、政治面、文化面など、それぞれのジャンルの情報がある程度網羅されていることです。また、ぱっと開けばぱっと目に入り、見出しによってどこにどのようなことが書いてあるかが一瞬でわかる、つまり一覧性が高いのも新聞の特徴の一つです。新聞はTVに比べると、それぞれの新聞社のスタンスを反映しやすいため、各紙を見比べると強調されている意見が逆だったりすることがよく起こります。これも新聞のもう一つの特徴として押さえておかなければいけません。

ではTVや雑誌はどうでしょうか。ここで、なぜ雑誌を書籍でなくTVの仲間に入れたかという点、雑誌は毎週毎日発行されるもので、新聞に比べるとエンタメ的要素が強いため、個人的にTV

のほうに入れておきます。TV や雑誌の特徴としては、一つは、映像なので視覚的にわかりやすいことです。新聞にも写真は出ていますが、雑誌のほうが量が多かったりカラーだったり、新聞よりも写真の情報量が多くなっています。わかりやすく、面白いわけです。

大きい地震があったときなどは、TV は特番に切り替わります。これは割と速いほうです。新聞も号外が出ることもありますが、それでも一日に二回ほどしか発行できません。新聞が遅いわけではありませんが、やはりTV は柔軟に速く報道がしやすい媒体ではあります。一方で気をつけなければならないのは、スポンサーの影響を受けることがあるということです。強力なスポンサー、たとえばシャンプーのスポンサーがついている番組で、「シャンプーを使いすぎると頭の地肌に悪い」などという情報は流せないわけです。これは当然で、シャンプーを売ろうという会社がCMを出している番組で、シャンプーを売れなくするようなことを言ったら、何のためにお金を出してもらって番組をやっているのかわかりません。ニュース番組などでは、この傾向はそれほど強くないとは思いますが、少なからずあります。これは注意すべきポイントとして押さえなければいけません。また、映像なのでインパクトが強く、「事実を精査する」ところでスルーされやすい。印象が強くなるので、目に入った情報がそのまま評価のフェーズにつながってしまいやすい。これがTV について気をつけなくてはいけないところです。

そして三つ目が書籍、本です。本というのは、基本的に情報が遅い媒体です。そこ（会場内）に僕の本が並べてありますが、『こども六法』（弘文堂）は書き始めてから本が出るまでに5年かかっています。そのほかの本も、一番速かったのが『ネット・スマホ攻略術ーネットが最強のパートナー

になる デジタルネイティブのためのー』（講談社）ですが、これは昨年11月に書き始めて今年の4月に出ており、半年かかっています。皆さんは半年前のニュースを思い出せますか。半年前というのは、東京オリンピックを無観客にするかどうかの議論もまだ起こっておらず、「本当にやるの？」「一応やる方向らしいよ」くらいのシーズンですが、もう覚えていませんね。ですから「東京オリンピック、本当にやるのか」みたいな本をいま出してみてもしかたがありませんね、もう終わっていますから。このように、書籍（の情報）というのは遅いのです。そのかわり、けっこう考えて著者も書いているし、けっこう考えて編集者も直しているし、さらに、載っている情報に対して、事実が精査されているか、本当に裏付けがあるのかをチェックする専門の人が入ったりもします。このために、本というものは出すのに時間がかかるわけです。だから全部正しい、とは言いません。中には間違っているものもありますが「何でそんなことを言ってるの？」というようなスーパーでたらめ情報は、比較的少ないと思って大丈夫です。これが本の特徴です。

一方のネット記事、これは新聞に近いと考える人もいます。新聞をとっていない若い人たちは、だいたいネットでニュースを得ています。最近ではTV も視聴率が落ちてきていますので。ではネット記事とは何なのかというと、新聞社がやっている場合もありますが、ネットギーク、ハフポスト、カラパイアなど、あるジャンルに特化したニュースサイトもあります。これらは雑誌に近い感覚になってきますが、最新のガジェットや最近オープンしたラーメン屋を紹介する、あるいは、一つのニュースをとってみても、少し違った角度から紹介したり、新聞などでは取り上げないような角度から取材をしているものがあります。これがネット

トニュースの特徴であり面白いところです。たとえば最近、個人的に面白いと思ったのは、眞子さまの結婚のニュースが最初に出たときの街頭インタビューで「すごく残念でショックだけど、幸せなら OK です」と言った人がいて、この人の画像はインターネット上でフリー画像のように拡散していますが、その人に対して「今、どう考えているのか」取材したネットニュースです。こういうことは、たぶん新聞ではやりません。TVで4年前の街頭インタビューに答えた人に、今どう思っているのか聞きたい、というニーズもあり、僕はそれを面白いと思ったわけです。「月曜から夜ふかし」(TV)などでやっているかもしれませんが、ニュースとしては、そのような感じのジャンルになるわけです。このようなことができるということが、インターネットニュース、ネット記事の強みです。ただ気をつけなくてはいけないのは、ネット記事は、ネットを使うそれぞれの人の情報や取材の切り口の好みに合わせて読まれることです。すると、この後に説明しますが、“エコーチェンバー現象”が起こりやすくなります。

最近多いのはインフルエンサーです。はじめしゃちょーやヒカキンのような人のことで、つまり個人ですが、自分の持っているメディア、たとえば YouTube チャンネルではエンターテインメントを発信することもできますが、たまに“案件”といって、商品の紹介をすることがあります。もちろん広告料を取っているわけですが、自分の持っているメディアで広告をすることもできるし、「自分はこう思っている」と意見を届けることもできます。ヒカキンの YouTube チャンネルの登録者数は一千万人です。そこへ動画を投げれば一千万人が見る可能性があるわけです。このような個人のことをインフルエンサーといいます。我々が慣れ親しんでいる、芸能人といわれる人たちも

インフルエンサーです。インフルエンサーの意見は、拡散力が高いという特徴があります。動画を一本アップロードしたら一千万人が見るわけですが、一千万人とは、東京の人口分、ほとんどの人が見ているという規模感です。このような拡散力の高さがインフルエンサーの特徴で、これはメリットでもあり注意点でもあります。あくまでも個人の意見である、という特性を踏まえる必要があります。これは注意点というよりも特性なのですが、「個人の意見である」ということは、たとえば今度選挙がありますが、そのインフルエンサーが「選挙に行きましょう」なら別にかまいませんが、「〇〇党に絶対に入れるべきです」と言い、皆が「この人が言うなら間違いない、入れよう」となったら、これはポピュリズムです。このような情報を受け取るにはあまり適していません。しかし、インフルエンサーが、たとえばある商品について、「このハムスターの絵がいっぱい描いてある紙コップは、熱い飲みものを入れても全然熱くならず、おいしく飲めます」のようなレビューを発信していたら、その紙コップが欲しくなりません。それが「案件」であるにせよ、自分の言葉で発信しているということは、その商品が本当によいものなのかどうか、私たちがその商品を買うにあたって参考にする意見としては、とても価値が高いわけです。「個人の意見である」ことについては、よいことと悪いことがあるという点は、きちんと理解しておかなければいけません。これは情報の特性です。

今、五つ(新聞、TV、書籍、ネット記事、インフルエンサー)を紹介しました。私たちはふだんからいろいろな情報に触れていますが、どれがよくてどれが悪いということはなく、どれかがすべてを満たしていて万能ということもありません。それぞれの情報源をバランスよく組み合わせた

り、それぞれにあたりたりして、「この情報源にはこういう特性があったな」ということを理解して情報を見てゆく必要があります。

そこで、先ほどネット記事のくだりで出てきた“エコーチェンバー現象”についてお話します。エコーチェンバーとは反響室（音が反射する部屋）、やまびこを意図的に作り出す部屋のことで、音楽やナレーションなどの収録に使われます。僕は音楽の仕事もしていますが、収録に使われる部屋は基本的に吸音材になっていて、音が反響しないように作ってあります。これとは異なり、エコーチェンバーは音響の効果として、たとえば洞窟の中でしゃべっているような声を録りたいときなど、今はエフェクトをかけることもできますが、それがなかった頃は、反響を意図的に作り出す部屋を使っていました。自分の発した声は何回も跳ね返って自分の耳に入ってくる、そんな部屋の名前からつけられたのが“エコーチェンバー現象”です。それはどのような現象なのでしょう。

インターネットには、ユーザーがどのような情報を見ているかが追跡されているという大きな特徴があります。たとえば、先ほどから僕はラーメンの話ばかりしていますが、ラーメンのことばかり調べていると、「この山崎聡一郎という人間は、どうもラーメンが好きらしい」、また世田谷のラーメンのことを調べているので「世田谷区の近くに住んでいるのではないか」、さらに「豚骨ラーメンは嫌いで、醤油ラーメンが好きらしい」、しかも、調べて行っているラーメン屋の客層からして「十代～三十代の人なのではないか」という情報をインターネットは収集します。これがフェイスブックなどの自分で自分の情報を登録する制度になると、自分で興味の対象や年齢を入力することによって、「これくらいの年齢層」というところからさらに絞り込むことができるように

なりますが、これはすごいことです。たとえば最近、インターネットのツイッターでバズっているのですが、Googleなどで自分の年齢を入力するときに、本当は若いにもかかわらず78歳とした人がいます。すると、Googleはウェブ検索のときに表示される広告が「腰痛でお悩みなら～」、「今のうちにお墓を買っておきませんか」のようなものばかりになったという話があります。ターゲティングとって、この広告は僕が見ているようなところに出てきても意味はありませんが、本当に腰の痛みに悩んでいたり、自分の人生の幕引きを考えている人が見たら興味を持ちます。これは広告として効果的ですよ。このように、見ている人に対して適切な広告を出すしくみが埋め込まれているのです。

ネットニュースで出てくる情報は、インターネットで調べている画面の前の人に最適化されているということです。たとえば僕はラーメンに興味があるので、ニュース一つとっても、「世田谷区に新しいラーメン屋が誕生」、「こういう新しいラーメン屋が出ました」のような、他の人には表示されないニュースが出てきたりします。見ている人に最適化されているわけです。僕は麺類全部が好きなのですが、たとえばラーメンには興味があっても蕎麦には興味がない人だとすると、蕎麦のニュースを流してもしかたがないわけで、こういうニュースを見ている人だ、ということを判定しているわけです。こうなってくると、僕の周りはラーメンのニュースばかりになってきます。これを「エコーチェンバーみたいだね」というわけです。自分が求めている情報、自分の意見に近い情報が入ってくるようになります。さあ、これの何が問題なのでしょう。「いいじゃないか。自分の見たい情報、好きな情報ばかり入ってくれば便利じゃないか」と思いますが、こういう情報ば

かり入ってくると、僕はこういうふうを考えるようになります。「世界の人たちは皆ラーメンが好きなんだ」、「世の中の人、みんな醤油ラーメンが好きなんだ。塩ラーメン、豚骨ラーメンはいらなないじゃん」というように、自分の意見が、さも世界中の意見であるかのように錯覚し始めるのです。これはラーメンの例なので冗談ばいですが、政治の話などは本当にそのとおりで、選挙直前なので、あまり政治の話には深入りしないようにしようと思いますが、〇〇〇党支持の人には〇〇〇党に都合のよい情報ばかり出てくるし、△△△党を応援している人には△△△党の記事ばかり出てくるわけです。すると、「世界中の人が本当は〇〇〇党（あるいは、△△△党）を支持しているのではないか」という感覚になってきます。そして「なのに、なぜ選挙でそれが反映されないのだろう。もしかしたら、そこには票の操作があるのではないか。陰謀が働いているのではないか」という考えが起りやすくなっていくわけです。ワクチンについても同様です。このような“エコーチェンバー現象”というのは、インターネットだからこそ、より起りやすくなっている問題です。先ほどお話しした、ネットニュースで自分の興味のあるニュースばかり出てくるというのは、たとえば Google Now でニュースを見たりすることでも起りますが、ツイッターなど、自分でフォローしたい情報をフォローするサービスで、わざわざ興味のない情報をフォローする人はいないでしょう。世田谷区にやってくる渡り鳥の情報をフォローしている人はいますか？それは興味がある人が（フォロー）するアカウントですよ。興味のない情報は、インターネットでは出てきません。これがインターネットの大きな特徴だということを把握しておいてください。

次に行きます。数学は何のために勉強するの

か？これは広く言うと、学校は何のために行くのか、勉強は何のためにするのか、に近いと思います。よく言われますが、連立方程式など、社会人になったら別に使わない。サイン、コサイン、タンジェントなど、卒業してから一度も使ったことがない。僕も使ったことはありませんが、なぜこんな勉強をするのか、と。ここで次のスライドです（資料・図8）。学校の勉強は何のためにやるかという、この三つ（情報を調べる力、事実を精査する力、事実を評価する力）を実現するためですが、もう少し深入りして言うと二つあって、一つは情報を集める力を身につけること、二つ目は情報を整理する力を身につけることです。たとえば、国語の評論文の授業を取っているというときに、その国語の文章をそのまま読む力というのは、情報を集める力です。日本語を読めなければ、日本語で書かれている文章を理解することはできないからです。「リンゴは赤いからすっぱい」という文章があったとします。もし日本語が読めなければ、これを文章として認識することができません。だから日本語として読める力が必要で、これが情報を集める力です。リンゴを食べたことがあったり、リンゴは甘い食べものであるということを知っていれば、「リンゴは赤いからすっぱい」は事実でないことがわかるわけですが、重要なのは、たとえリンゴが甘い食べものであることを知らなかったとしても、今の話がおかしいということがわかります。なぜなら、この文章ではリンゴは赤い“から”すっぱいと言っています。リンゴが赤いという事実とすっぱいという事実との間に、どのような因果関係があるのでしょうか。ここに繋がっていない情報があるわけですが、「ああ、そうなんだ。リンゴは赤いからすっぱいんだ」と思うと、「パプリカ、トマト、担々麺もすっぱいのか？」と考えてしまうような、よくわ

からないことが起きます。

今、とてもばかばかしい例を挙げているので「そんなわけが・・・」と思うわけですが、そのぐらい日本語が読めない人が今は多いのです、残念ながら。だから「リンゴは赤いからすっぱい」というと、ロジック的につながってないのですが、このロジックの分断を見抜くことができません。このロジックの分断を見抜く力をつけるのが、学校なのです。学校で勉強している内容は、数学などに顕著ですが、その前の数式と次に書いた数式がつながってないと、一番最後に出てきた数式で答えにたどり着きません。このように、筋道立てて考える力をつけなくてははいけません。これを身につけるのが数学の授業であって、論理的思考力というものなのです。「リンゴは赤いからすっぱい」に、だまされないようにするための力をつけているのが、数学の授業なのです。

では、だまされやすいのは一体どういう人なのかというと、要するに学校の勉強をサボった人です。学校の勉強をサボって、どういう力が身につけてないからだまされるのかというと、この一番「情報を集める力」と二番「情報を整理する力」がついていない人で、具体的にどういう人になってしまうかということ、刺激と反応が近い人です。世の中には、いろいろなことがあるわけです。いろいろ刺激を受けて、私たちは生活しています。ちょっといやなことを言われたら怒るとか、面倒くさいことを言われたらぶん殴るとか、何か刺激があって、それに対して私たちは行動を起こしたり、何かを感じてそれをアウトプットしたりします。その刺激と反応との間に「思考する」という隙間を作ろうとしているのが、学校での勉強なのです。一面では、事実の「把握」と「評価」を分けるということです。

会社に就職して、何でもかんでもパワハラだと

言ってしまう若者がいる、という話を聞きます。たとえば、この会社が8時に始業で、ルールを守れと言ってもいつも遅刻する人がいて、怒るとします。「8時までに来なさい。8時5分ではだめだよ」と言ったときに、言われたほうの若者としては「自分の尊厳が傷つけられている」というふうに感じるのです。「8時5分に来ている」という事実と、「8時5分に来ているから、それを直さないといけない。それは悪いことだ」という評価がごっちゃになっています。さらに面倒なことに、「悪いことをしているお前は能無しだ」という、言われてもいない評価を一緒につけているわけです。だから、人格が否定されているように感じるわけです。

刺激と反応がすごく近くなっている、考えてない、という状態になる人が残念ながらいるわけで、別に今の若者に限らないと思います。「もうずっと大人やってるんですけど」という人の中にもこのような人がいると思いますが、学校で勉強していない人は、こうなるわけです。

あとは、持っている情報量知識量が圧倒的に少ない人です。「インターネットは危ない」そう思っている人は少なからずいると思います。しかし、持っている情報量が圧倒的に少ない人がそのように思っていることがけっこうあります。情報量が少ないということは、評価に移るときの判断基準になる情報が少ないということですから。

たとえば、ある人が「ワクチンは危ない」と思っているとします。そして、ワクチンに対してその他に知っていることが何もないとします。このようなとき、「ワクチンは危ないらしい」と検索すると、ワクチンがなぜ危ないかという情報がいっぱい出てきます。すると、他にワクチンのことを何も知らないので、ワクチンがなぜ危ないのかという情報だけが溜まっていきます。その情報に

基づいて判断すると、「ワクチンは危ない」になるわけです。逆もあると思います。ワクチンについて何の情報も持っていない人が、「ワクチンは安全なのか？」みたいな情報を集めていったときに、ワクチンは安全ですという情報だけが入ってくると、「ワクチンって安全なんだ」としかならないでしょう。

世の中の多くの物事について判断をしようと思ったら、「ここがわかっている」、「ここがわかってない」、「ここは危険」、「ここは安全」という情報を揃えれば揃えるほど、判断の精度は上がっていきます。そして、その情報の一つひとつにも、正しい情報、間違っている情報、もっともらしく見えても「リンゴは赤いからすっぱい」のような（ロジックの破綻した）情報があるわけです。たとえば、僕は実際に言われたことがあるのですが、「新型コロナウイルスの致死率は1%もないじゃないか」と。これは事実で、1%ありません。ただし1%死んだらすごいことで、日本人160万人が死ぬことになります。逆のことも言えます。新型コロナは怖いんだと言うときの文脈として、たとえば「1万6千人死んでるんだよ。交通事故で死ぬ人って毎年3千人ぐらいだよ、交通事故の5倍の人が死んじゃう病気って大変じゃない？」と言うこともできます。これはけっこう大事です。調べる癖、考える癖をつけましょうという話で、学校でちゃんと勉強してこれらの癖をつけると、だまされなくなります。どういうことかという、今言った「コロナの致死率1%にもならない」という事実、これは精査しても事実です。しかし、「だから怖くない」という評価、これを分けないと、「1%ないから大丈夫」、「1%いつている病気だけが怖い」というふうに事実の把握を歪めてくるかもしれません。では、他に致死率1%を超える病気にはどのようなものがあるのでしょうか。狂犬

病などは致死率ほぼ100%です。ああいう病気は確かに怖いですね。ですが、「狂犬病を防いでいるのはワクチンだ」という情報にたどり着いたり、「本当だろうか？」と、評価の前にもうちょっと情報を調べようという癖がつくわけです。

また、情報は事実であれば何でもよいわけではなく、メディアなどは、見せ方で印象を変えてくることがあります。「交通事故で年間3千人しか死んでないけど、新型コロナだったら去年1万人以上死んだんじゃないか。交通事故の3倍以上の人が死ぬなんて、なんて恐ろしい病気なんだ」と言えば、確かにコロナはたいへん怖い感じがします。ところが、日本人は年間2万人が自殺しているのです。「実は、コロナで死んだ人より自殺した人の方が多いんですけど」というふうに言うと、「たいしたことないのかな？」と思うかもしれません。今並べた数字はすべて事実ですが、このように並べ方などでも印象は違ってきますし、「そもそも、交通事故の死者数と自殺者数とコロナの死者数を並べることに何の意味がある？それって要するにリンゴは赤いからすっぱいって言っているのと一緒にじゃないの」という点に気づけるかどうかです。

このように、そういう場面で情報を精査する力が身につくかどうかというのが、学校で勉強する意味です。あとは「本当かなと思ったときに追加の情報を調べる癖をつけましょう」と言いましたが、この癖がついていることで、今まで知らなかった情報に対して主体的に情報を集めることができるようになるわけです（資料・図9）。たとえば、マスクや手洗いの有効性はともかく、ワクチンの有効性については、コロナの前からかなり詳しく知っていたという人はいないでしょう。お医者さんならともかく、「私は、実は感染症対策についてコロナ前からすごく詳しく知っていたんです」という

人は、たぶんいないと思います。コロナがこれだけ流行ってから、「マスクが大事だね」とか、「手洗ってやっぱり大事なんだね」、「うがいも大事だね」とか、「ワクチンって打っておいた方がいいんだね」とか、「打たない方がいいんだね」とか、「なぜなら〜」というのを、たぶん問題が起きてから調べたはずです。

こういうときに、調べる基礎力がついていないかどうか大事です。ただ流れてきた情報を鵜呑みにするのか、自分から情報を取りに行ける癖がついているのか。その癖をつけるために、中学生は図書館を使ってくださいということです。もう一つ大事なことは、これは大学院などで勉強すると特に思うことですが、私たちが素人として知ることができる情報には限界がある、ということです。私たちがコロナウイルス感染症についてどれほど勉強をしたとしても、そのウイルスが人間の体に入ったときにどういう作用を及ぼし、どういう症状を引き起こし、どういうふうに我々を苦しめるのかということについて、医者ほどにはわからないはず。絶対にとは言えませんが、「来年、医師免許を取ります」という人は別として、ほとんどの人はそうではないでしょうか。

その分野については素人である、というときに、情報を調べることが無駄とは言いません。これをたくさん知っておくことによって、「自分はここまで知ることができたけれど、ここから先は専門家の領域なんだ」ということを知ることができるわけです。そうすると、自分で何でも知った気にならず、「ここから先は専門家に聞こう」となります。専門家に頼れるようになるということが大事なのです。世の中、だいたいの方が何かの分野についての専門家であるわけです。僕は教育研究というジャンルにおいては専門家ですが、実は法律というジャンルにおいては専門家ではありません。

そして、僕は教師ではありませんので、人に教えることについては専門ではないわけです。だから「授業をするということについては、学校の先生に任せるのがいいに決まっている」という話になりますが、しかし学校制度をどうするのかという議論については、実は現場にいる先生よりも僕のほうが世界中の事例などに詳しくたりするわけです。

僕の父親はロケットエンジンの技術者ですが、僕がロケットエンジンを作るのは無理です。その仕組みについては、勉強すればある程度の知識が身につくかもしれませんが、前澤さんやホリエモンがロケットを自分で設計して打ち上げるようなもので、無駄なことです。あの人たちは自分で設計しているわけではなく、お金を出して、その道に詳しい人に協力してもらって作っているのです。知識を入れられるようになっていけば、このように専門家を頼れるようになるわけです。

以上が、学校教育、あるいは図書館の活用を通じて身につけなければいけない、というお話でした。これで今日の話を終りたいと思います。ありがとうございます。

【第三部 質疑応答】

[質問者 A]

『こども六法』を私の孫、小学校2年生の男の子に読ませたいなと思いましたがちょっと難しいようでした。漫画でなら2年生でも読めますか？また、どういう思いで『こども六法』をお作りになったのか教えてください。



[山崎先生]

『開廷！こども裁判—まんがこども六法—』（講談社）であれば、おそらく裾野はより広いと思います。『こども六法』（弘文堂）は、もともと10～15歳の想定（読者）で書きました。5～6歳から読んでいる子もいるということを知っていますが、子どもの興味関心次第だと思っています。ですから、小学校2～3年生くらいで読めなくても気にする必要はないと思います。漫画版は、解説はそれなりに難易度がありますが、中身を読むだけでも伝えたい内容は入っていますので、興味を持ってくれるのであれば、読んでみると面白いと思います。

『こども六法』を作った理由については、自分自身がいじめの被害経験から中学生のときに法律を読み、これを小学生のときに知りたかったという後悔があった、というのはありますが、もう一つ、法律は誰の生活にも関係あるものですが、誰でも読めるように書かれているかというところではなく、割と難しいわけです。難しいからこそ、これを子どもが読むことが想定されていないと強く思いました。今講演しているのは図書館ですが、学校の図書室には六法というものを置いてないわけです、読むことが想定されていませんので。でも、それを「子ども向けです」と言って、かわいいイラストと一緒に書き下したら、大人からは子ども向けに見えます。そうすれば、たぶん図書室にも置いてもらえるだろうと考えて作りました。結果的にそうになりましたので、そこは読みどおりでした。このような狙いがあったということもあり、大人向けの本も、ものによってはぜひ子どもの手に取れる場所に置いてほしいと個人的には思っています。

[質問者 A]

それは学校の授業に取り入れてくれているのですか？

[山崎先生]

『こども六法』のバックグラウンドには法教育という教育手法がありますが、これは法務省が2001年から推進しているもので、学習指導要領にも入っています。ただ、高等教育学会という教育の手法を研究する学会の中で『こども六法』と呼ばれてきましたが、その学会に参加しているのは、弁護士や司法書士などの法曹資格を持っている人、大学の法学部の教授、一部に小中高の学校の先生が含まれていますが、とても意識の高い先生ですね、その学会に参加してまで自分の授業で法教育を実践するという

のは。そのような意識の高い先生が、一応学習指導要領にも入っているからやっているというのが法教育の現状で、その中で『こども六法』を使っている先生もいます。

[質問者 A]

子どもたちには、知識を持つことで自信を持ってもらいたいなと思います。

[山崎先生]

そうですね。

[質問者 A]

本当に現実には悲しいですね。ありがとうございました。

[質問者 B]

気づきの多い講演をありがとうございました。だまされないようにすることもなかなか難しいです。一つ質問ですが、だまされない知識とともに、だまされない感性を磨くには、どのようにしていけばよいでしょうか

[山崎先生]

なるほど、だまされない感性ですね。「学校の勉強は何のため」というスライドの、「情報を整理する力を身につける」の中で、「情報を精査する思考力と感性」と書いてあります（資料・図8）。この感性というのはいったい何を想定しているかということ、論理的思考力を身につけましょう、考える力を身につけましょう、と言うだけでは、「じゃあ音楽とか美術の授業っていないんじゃない？」となってしまうわけですね。なぜ必要だと思いますか？ このへんは感性の話になってくるわけです。感性というものには正解がありませんので、ある人が美しいと思っている絵画、ある人が素晴らしいと思っている音楽にまったく惹かれない、というのは間違っているわけではありません。しかし、それがなぜ評価されているのかをロジカルに把握するということは、やはり授業の中でしないといけないし、同じところに自分も感動するという見方を磨いたり、あるいはそれと異なるよさを見つけるという、自分ならではの視点に気づいたりする感性を磨くことが授業では重要だと思っています。そうすることによって、芸術というものは表現そのものですから、自分の意見や主張を伝えるときに、ロジカルにプレゼンテーションにするとか、本や文章を書くということ以外に、絵を描いたり、音楽にのせたり、いろいろな表現方法があるわけです。それによってコミュニケーションをするということが大事で、自分が情報を受け取る感性と、発信をするときに自分に向いている表現手段——理詰めで話す伝え方が得意な人もいれば、絵を描いて伝えることが得意な人もいます——その選択肢を増やすために、感性の教育はあるのではないかと思います。

[質問者 C]

ご講演の後半で、中学生は図書館へ行ってくださいとおっしゃっていましたが、図書館でだまされなくなる、新しい知識を学び続ける、専門家に頼れるようになることがどのように実現できるのかを、わかりやすくご説明ください。

[山崎先生]

なるほど、ハウツーのほうですね。たとえば図書館の取り組みはどうでしょう。これは僕だけで答えるよりディスカッションしたほうがよいような気がしますね。

[會田館長]

時間があれば本当にディスカッションするような質問ですね。

[山崎先生]

やり方は図書館や地域ごとの特性、通っている学校の教育によって変わってきますので、唯一の答えはないと思いますが、僕だったら、「検索コンテスト」というイベントをしたいと思います。チームごとに分け、A4の紙に5個の命題を用意します。たとえば、「いじめが増えているのは悪いことか?」という命題を用意して、それについて関連する事実と、それに対する要論の評価と、それを踏まえたうえで自分の回答を論じさせて採点します。大学受験の小論文のテストくらいまで行くと、ちょっと大きいですが、慶応大学では「論述力」という試験があります。小論文より少し短いのですが、これを中学生のうちから解かせ、図書カードをプレゼントするなどのイベントをやってみるとおもしろいと思います。なぜこのようなアイデアが出てくるのかというと、僕が中学校の図書室でやっていたからです。公共の図書館ですとなかなか予算がつかないと思いますが。

[質問者 D]

GIGA スクール構想に、コロナ禍で急速に対応せざるを得なくなったとのことですが、保護者がタブレットの利用制限などをできないのがその影響ですか? YouTube などの制限をかけてもよかったのではないのでしょうか?

[會田館長]

セキュリティについてはじっくり話をする時間がなかったのと、今回の本旨とは違うかなと思いましたので、曖昧にしか答えませんでした。

セキュリティについては各自治体も非常に悩んでいて、けっこう（対応が）分かれています。「情報モラル」という言葉がありますが、今までは非常に厳しい「触らせないようにするんだ!」という形のセキュリティがかかっていました。一方で YouTube については、国でも都でも、さまざまな教育を、「見てください」というコンテンツを作っているのですが、それを見えないようにしてしまうと、おか

しなことになってしまいます。今までは、YouTube については一切見せないという自治体が多かったのですが、それを今回は見せるようにしました。一方で、暴力的なもの、あるいは問題になるような表現のあるコンテンツについては、基本的には見せないよう制限はかけました。ただ、どうしても抜け道があります。それをガチガチにやろうとすればするほど、逆に有用なものも見えなくなってしまいます。デジタルシチズンシップという考え方がありますが、積極的に見られる環境を、一緒に考えながら読み解いてゆこうという方策へシフトを切り、「情報モラルからシチズンシップへ」ということで今回はやりました。さまざまな意見をいただいていますので、制限の仕方等々については検討してゆきたいと思いますが、今はこのような形でやり始めたことをご理解いただければと思います。

以上

図 1

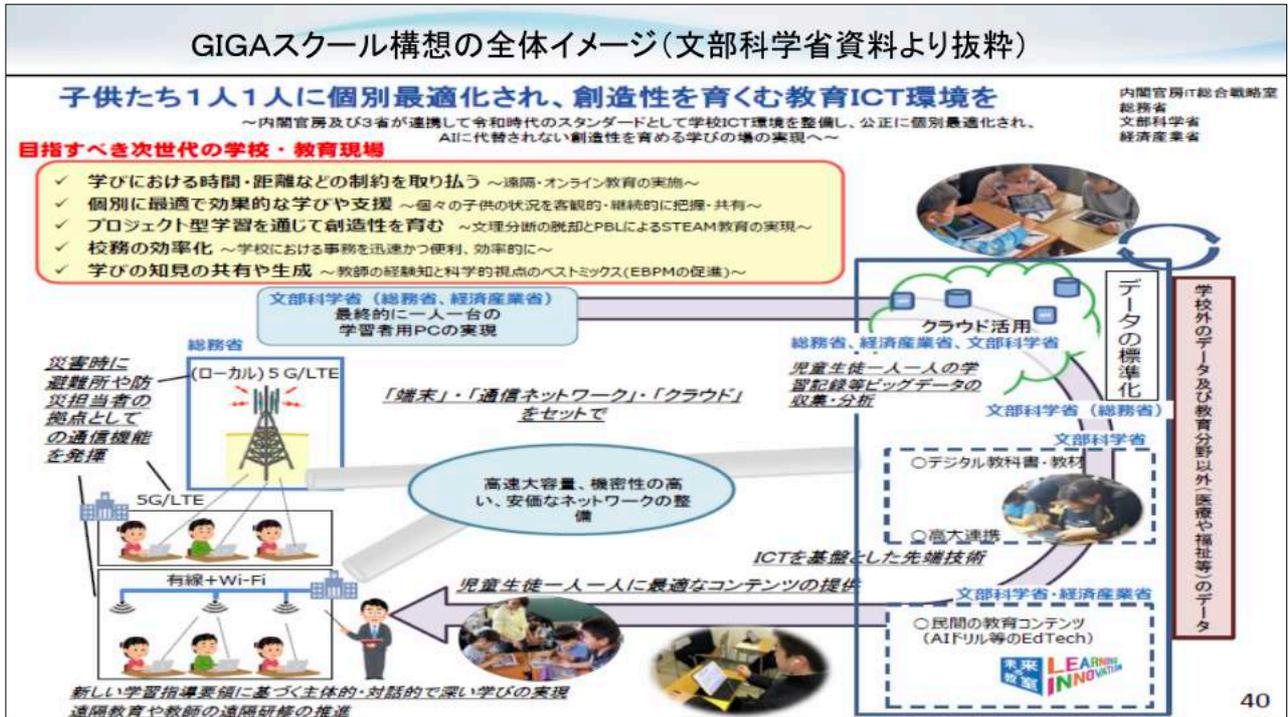


図 2

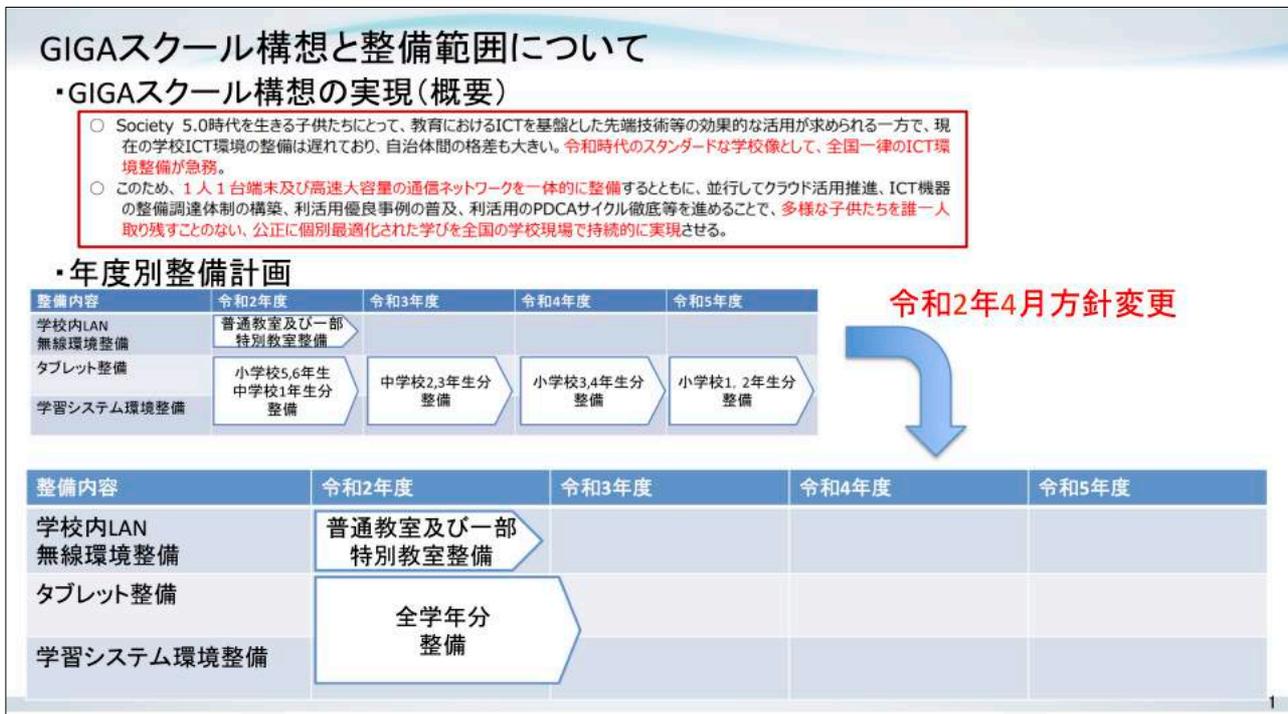


図 3

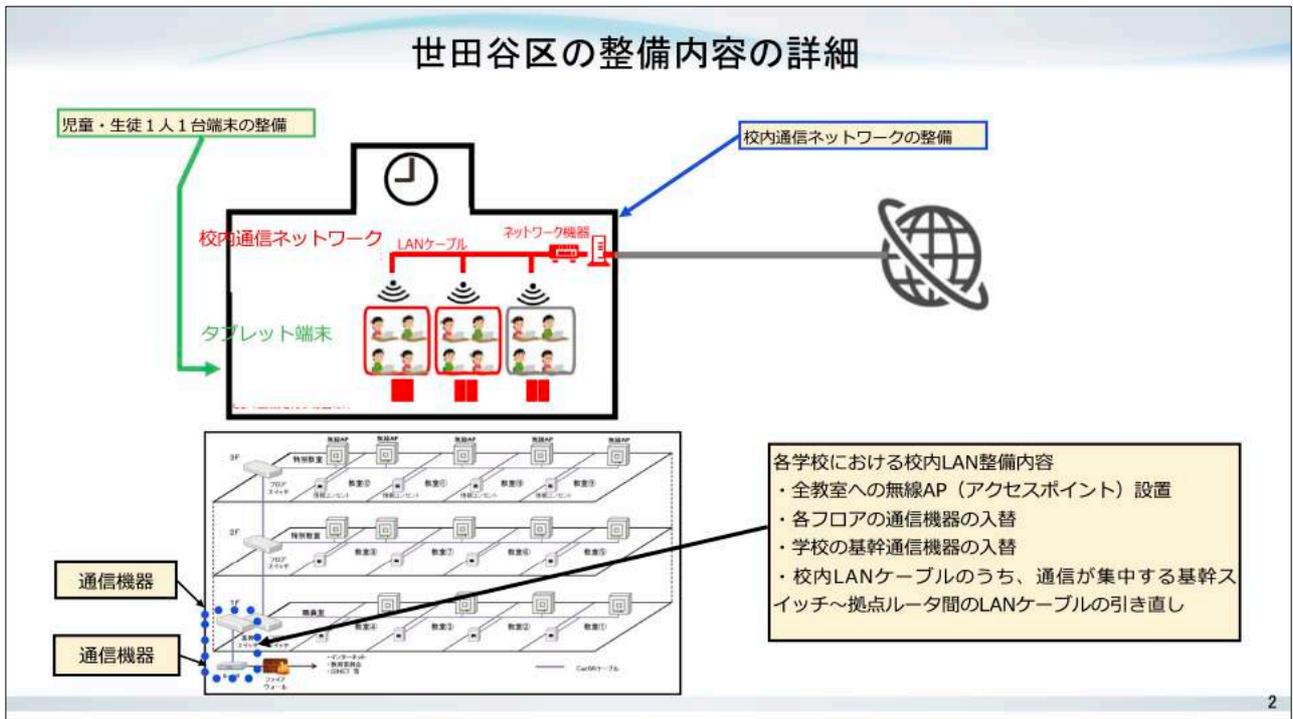


図 4

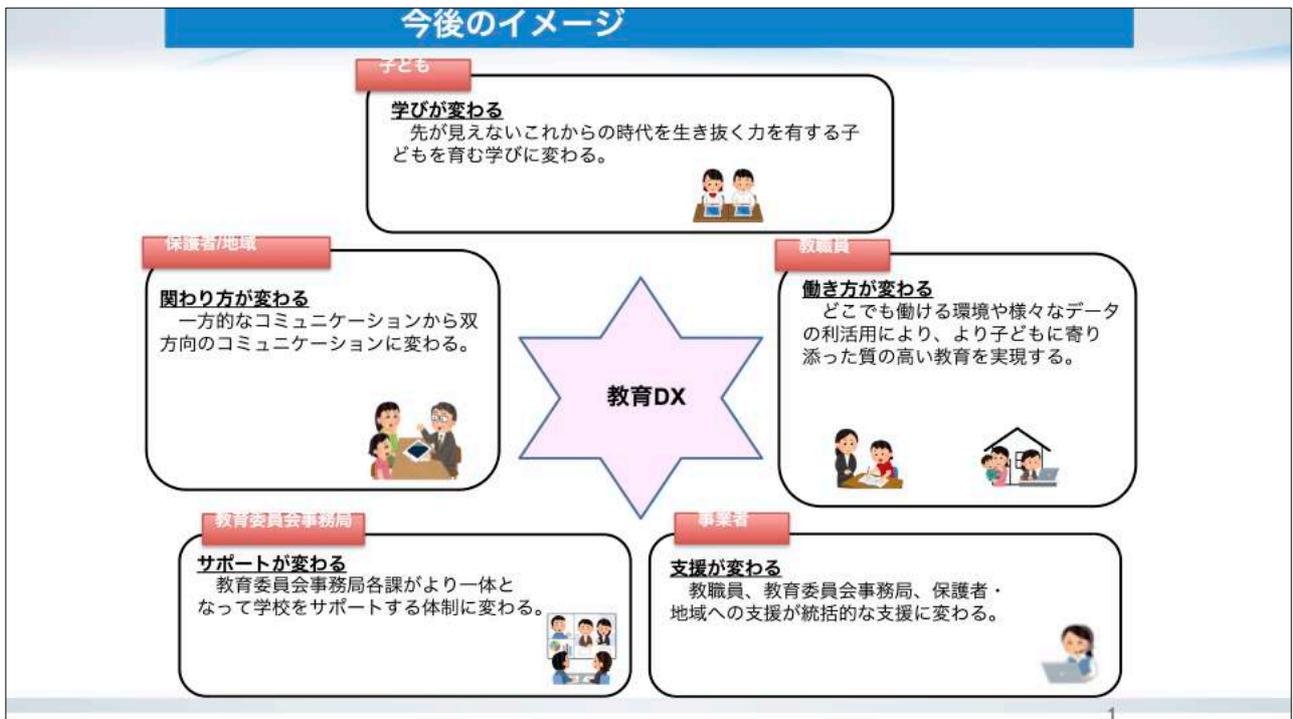
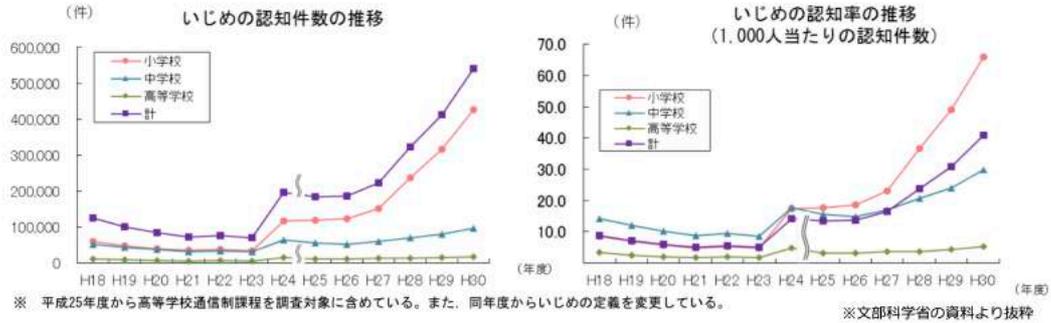


図 5

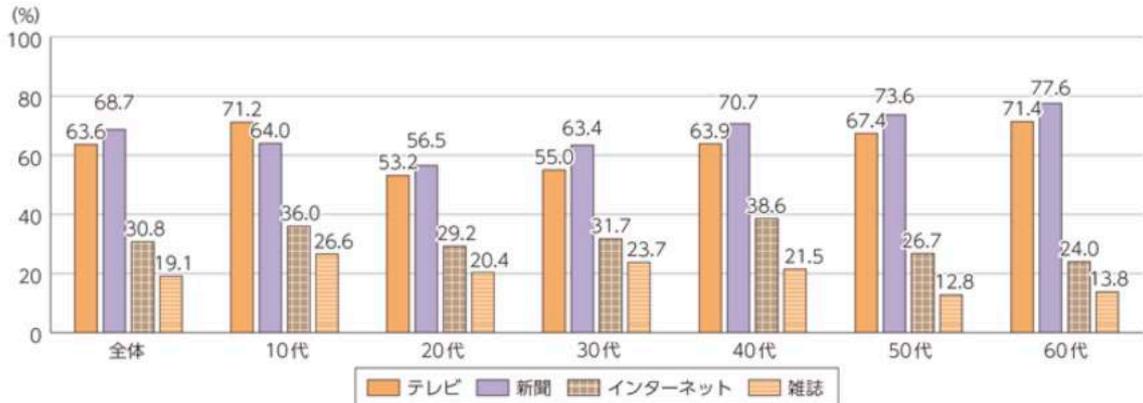
小・中・高等学校及び特別支援学校における、いじめの認知件数は543,933件（前年度414,378件）と前年度より、129,555件増加しており、児童生徒1,000人当たりの認知件数は40.9件（前年度30.9件）である。認知件数について、全校種（小学校は425,844件、中学校は97,704件、高等学校は17,709件、特別支援学校は2,676件）で増加している。



例：「いじめが増えるのは悪いことだ」

- ①「いじめ」とはどのような現象か？ 何が起きたのか？
- ②わかったことは本当だろうか？ 誇張ではないか？
- ③本当らしい事実は良いことか、悪いことか？

図 6



メディア別信頼度(全年代・年代別)

(出典)総務省(2018)「平成29年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」を基に作成

図 7

様々な情報源の特性を理解する

1. **新聞**
 - ・ 情報の早さ・正確さ・詳しさのバランスが比較的取れている
 - ・ 一覧性が高い
2. **テレビ・雑誌**
 - ・ 映像なので視覚的にわかりやすく、面白い
 - ・ 情報は比較的早い
 - ・ スポンサーの影響を受けることに気をつける
3. **書籍**
 - ・ 情報は遅いが、デタラメが書いてあることは少ない
 - ・ 図書館や書店で見ると関連情報に触れるチャンスが多い
4. **ネット記事**
 - ・ 情報が早く、新聞やテレビで扱わないジャンルのニュースも流れる
 - ・ エコーチェンバー現象が起きやすい
5. **インフルエンサー**
 - ・ 拡散力が高い
 - ・ 個人の意見である（商品レビューなどはためになりやすい）

図 8

学校の勉強は何のため？

1. **情報を集める力を身につける**
 - ・ 情報を集める前提となる知識
 - ・ 情報を収集する能力
2. **情報を整理する力を身につける**
 - ・ 情報を整理する論理力
 - ・ 情報を精査する思考力と感性

→騙されやすい人

- ・ 刺激と反応が近い人（「自分で調べる」「思考する」癖がついていない人）
- ・ 持っている情報量・知識量が少ない人

情報の海を冒険しよう

調べる癖、考える癖をつけると、無限の可能性になる！

1. 騙されなくなる
 - ・ 情報には「事実と嘘」があるだけでなく、切り取り次第で「印象」も変わる
2. 「必要になった」時に新しい知識を学び続けることができるようになる
3. 「専門家」に頼れるようになる

第16回世田谷区子ども読書活動推進フォーラムの報告

発行 世田谷区立中央図書館

〒154-0016

東京都世田谷区弦巻3-16-8

電話 03-3429-1811

FAX 03-3429-7436

発行年月 令和4年2月

広報印刷物登録番号 No.2030